

詠 詠 集

七月号



花鳥諷詠[®]

令和3年7月 ■ 第400号 ————— 目次



花鳥諷詠選集	木村 享史 2
	山田 佳乃 4
虚子研究 『六百五十句』研究 (18)	7
虚子研究 虚子宛書簡を読む (二十四) 明治二十五年一月十七日虚子宛林茂八郎書簡(封書)	椋 誠一朗14
子規と漱石と私 19 死所を選ぶ	18
新刊紹介	19
一頁の鑑賞.....	和田 和子20
	原田 佳織21
この人の作品	宮内 千早22
風報	23
「花鳥諷詠」四〇〇号記念企画 稲畑汀子会長に聞く	27
地区行事開催日程表	31
編集後記	32

「日本伝統俳句協会」と「花鳥諷詠」は公益社団法人日本伝統俳句協会の登録商標です。

花鳥諷詠選集

木村享史 選

特選五句

ライバルも同じお守り大試験

堺 新田 佐代子

春光をまとひ聖火の車椅子

山口 藤岡 いく子

人の来ぬ花つまらなく有り難く

大津 伊藤 薫

年毎に殖やして桜草の庭

今治 横田 青天子

歳時記の箱をなほしてゐる虚子忌

恵庭 青山 醉鳴

二句短評

一句目——受験生であろうか、合格を祈り授かつて来たお守りを胸に抱いて、座席に着く。

心を静めて見渡してみると、隣の席の机上にも同じお守りが置かれている。同じ神に祈って来たのだ。

二句目——不穏な雰囲気のまま、オリパラが開かれようとしている。聖火リレーも始まったのだ。

車椅子で走るのは、嘗てのパラリンピックでの選手か、掲げるトーチの炎に栄光の春日が眩しい。

入選六十句

玉砕の日を忌日とし墓洗ふ

埼玉 新井あい子

強東風や奉納絵馬を高鳴らせ

長岡京 算 双子

ほんぼりの闇やはらかに花の道

八尾 米澤 悦子

白梅の凜と薄紅梅ほのと

松江 小村 四温

満開の花に人影なき夕べ

久留米 谷川 章子

一水に添ひし花野の小径かな

川口 櫻井 松翠

手に受けて灰かに匂ふ春の雪

石川 堀口 道子

迫り出して水面にも花明りかな

高松 肥塚 英子

青き踏む卒寿の杖に歩を合はせ

神戸 上岡あきら

校門を母とスキップ入学児

金沢 金子 慶一

梅の香に静かに人の立替る

金沢 北川まつ子

富士白く多摩の横山大霞

横浜 竹田登代子

一息が無数となりぬ石鹼玉

半田 稲葉 京閑

恐きもの知らず寄り来る雀の子

松山 高橋 草天

風花に影あることの不思議さよ

野々市 中村 珠栄

眼中も胸中も今花のこと 浜田 田中由紀子
 しやぼん玉追ひかけて行く三輪車 北海道 工藤 牧村
 雪柳風の花かと思ふほど 鹿児島 所崎 玲子
 一村を手品のやうに消す黄砂 神戸 玉手のり子
 菜の花や小走りになる逢ひたくて 高松 岩田 賀代
 春の風吹けば会ひたき人のあり 船橋 佳田 翡翠
 ヘルパーを待つチューリップ活けてをり 大分 野村香代子
 あいさつのできる子となり桃の花 太宰府 持永真理子
 腰かけて足のとどかぬ入学児 長岡 桑原たかよし
 陽炎に明石大橋吞まれけり 芦屋 山村千恵子
 鯉の背に金の波打つ春日かな 藤岡 飯塚 柚花
 絶句する程の病名冴返る 糸島 春田美智子
 無人駅つづく単線辛夷咲く 福山 池上 幸子
 鳥帰る空に昼月そつと置き 金沢 鶴見 昭子
 雪解川滔滔と橋竣工す 北見 藤瀬 正美

野に遊ぶ子等は翼のあるごとく 太宰府 川路 泰子
 万愚節人に逢ふことなく暮れて 東京 大和田博道
 どの色のランドセルにも春の風 西脇 岸本 悦子
 一目惚れして五十年桃の花 四日市 丹羽みどり
 花の雨卒寿の吾が身いとほしむ 茨木 田村 椰子
 遠足のリュック仲良く車座に 小諸 清水 節子
 雨にまだ花の力の尽きてゐず 高松 岩瀬由美子
 くもる日は雲の色して山桜 鹿児島 柳橋かすみ
 早々と新居の庭の吹き流し 浜松 鈴木 浜子
 屋根替へて雨音もまた新しく 三田 吉村 玲子
 桜湯やみ吉野の香のほのと立つ 西宮 本郷 桂子
 一人づつ御髪なでつけ雛仕舞ふ 小千谷 大矢あきこ
 公園の入口出口花水木 八王子 さいとう二水
 風荒ぶ日は首すくめ亀の鳴く 立川 日置 正樹
 花種蒔く二年一組花係 太宰府 野田 杉子

● 山田佳乃選

特選五句

眺望の海も我が町風光る

輪島向

佐ち子

散る時はひとひらごとのさくらかな

さいたま 太田

野風

大試験終へていつもの子に戻る

福山 廣本

貢一

うららかや子の振り返る参観日

島原 荒木

アヤ子

先頭にゐて聞き逃がしたる初音

香川 三宅

久美子

二句短評

一句目——眺望というのだから高台から見渡す景にいつも海が見えるのだろう。住所としての町ではなく視界に入ってくる景も我町であるという把握がうまい。海の輝きが風光るといふ題で見えてくる。

二句目——満開のあと、はらはらと散るさくらの姿をよく見ておられる。中七下五のかな表記が表現の幅を拡げている。

菜の花のつつみ残した筑波山 福敷 杉崎 淑子
 初めから置かれたやうに落椿 高崎 並木 秋野
 快晴の花疲れとはここちよき 伊賀 永井二紗子
 今年また牡丹の庭に招かれて 久留米 大日方明美
 遠足や母の三角にぎりめし 三鷹 橋本 忠之
 青空に噴煙少し冬浅間 川西 小川 孝子
 たんぽぽや今年の花は大きくて 大阪 今村久美子
 雨冷ゆる石見に修す虚子忌かな 江津 篠原てるみ
 杉の木も檜も尖り山笑ふ 岩倉 春田 玉子
 桜葉降るもう誰も来ぬ園に 白山 辰巳 葉流
 春風や空へ伸びたる象の鼻 松山 門田 安世
 春暁を拝し一日を平らけく 東京 不破 澄子
 かすかなる水音つづきゐる遅日 八代 山下さと子
 気負はずに一句詠めよと山笑ふ 福山 楨岡 弘恵
 ぼうたんの蕾尖つてやはらかく 福知山 植村太加成

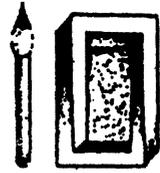
入選六十句

玉碎の日を忌日とし墓洗ふ 埼玉 新井あい子
春塵や瞑りしままの石仏 堺 杉山千恵子
ものの芽や調律済みしピアノ鳴る 東京 吉里ひとみ
あかときの鳩のくぐもり啼きて春 富山 片桐 久恵
燕飛ぶアルファベットを描きつつ 刈谷 青山 和生
手袋の片方だけの勝手良き 山口 西やすのり
北窓を開き潮騒近づける 小樽 伊藤 玉枝
朧夜の駅に着きたるアナウンス 西予 三瀬 教世
遊ばれてゐるのは私子猫抱く 神戸 岩水ひとみ
誰よりも父が愛でゐし雛飾る 札幌 押野 美江
新緑の空とは旅を弾ませる 七尾 松本 松魚
ライバルも同じお守り大試験 堺 新田佐代子
始まりし馬塞の修理や残る雪 神戸 柏原 憲治
付け馴れてマスク美人となつてをり 久留米 矢野 愛子
花人として校門をくぐりけり 小松 橋本 正乃

腰かけて足のとどこかぬ入学児 長岡 桑原たかよし
抱きしめて花巡りして納骨す 西予 末光恵美子
川幅をあふれ耀ふ春日かな 金沢 八百 恵子
古傷に加へまた傷恋の猫 名古屋 内藤 信子
おしゃべりの好きな子とゐてしやぼん玉 吹田 河辺さち子
落人の社ちさしよ遅桜 新潟 田代 草猫
人の世の人避けし間に花は葉に 下関 貞包 清子
うららかや南部鉄瓶鳴る野点 鹿児島 白石 白紘
いかなごを買ふ棧橋に人群れて 大阪 小玉ヒロ子
家居解きたく春日傘ひらきけり 神戸 内田 泰代
春暁の湖に残れる星一つ 松江 森木 八潮
人の来ぬ花つまらなく有り難く 大津 伊藤 薫
どの色のランドセルにも春の風 西脇 岸本 悦子
行先の思案に曲る蜷の道 井原 平 春陽子
花冷の朝やしとしと雨もやう 上越 八島三枝子

雨にまだ花の力の尽きてゐず 高松 岩瀬由美子
 ぐい呑みに三杯ほどの春愁ひ 大牟田 本田 守親
 エープリルフル誰にも会はぬなり 松江 三浦 純子
 照り翳りつつ春光を抜ぐ湖 高松 池田 裕子
 白線の掠れし歩道黄沙降る 加賀 出島 達子
 小舟より鳴れる汽笛や汐まねき 大牟田 前原八寿之
 代搔きを終へしばかりの濁りかな 宇佐 岡嶋あけし
 囀のこぼれ初めたる日の出かな 青森 七戸富美子
 鉄橋に一両電車花の駅 加賀 折橋紀与美
 桜湯やみ吉野の香のほのと立つ 西宮 本郷 桂子
 川波に吹き戻されし花筏 朝来 枚田登志子
 ひとめぐりもう一巡り夕ざくら 井原 坂本 一恵
 一筋の木洩れ日揺らし一人静 高松 鍋田 佳
 星明り眠りの深きチューリップ 福山 来山 静子
 島渡船揺れて春眠とろとろと 岡山 山口喜代子

快晴の花疲れとはここちよき 伊賀 永井二紗子
 遠足や母の三角にぎりめし 三鷹 橋本 忠之
 寂として花の舞ひくる能舞台 加古川 岩城 久美
 摩天楼黄沙の海に沈みけり 奈良 河村久美子
 ささやかな婚の荷に初蝶の来る 筑紫野 馬場三知子
 杉の木も檜も尖り山笑ふ 岩倉 春田 玉子
 花屑の沈みゆくとき透きとほる 岡山 石井 宏幸
 電線の上段下段囀れる 東京 岡田 圭子
 もう閉ぢる力の失せしチューリップ 大分 村上 久子
 初蝶の己が軽さにまどふ空 米子 前田 千
 あめんぼうぶつかり合うて進みけり 高松 井口 直美
 十歳に越さるる背丈あたたかし 春日 本田 久子
 水あるや無しやの川に猫柳 高知 田村 裕子
 小夜更けて花菜明りは月の色 八代 山下しげ人
 一片の落花目で追ふ静心 福山 楨岡 義道



編集後記

汗ばまずからりとおはす老師かな

虚子

瘦せているのに一本芯が通ったように姿勢がよく、周囲の人たちがハンカチで汗をぬぐっているのを横目に涼しい顔の師。単に年を召されているからではなく、何かを極めた方は、世俗も、暑ささえも、超越されているのかもしれない。私もお一人、そんな尊敬すべき方を存じ上げています。

●「花鳥諷詠」は、今号で四〇〇号となります。記念企画として、稲畑汀子会長のインタビューを掲載しました。現在掲載中の記事について、今後の企画やご希望など、具体的なご意見を頂ければ幸いです。

●この号がお手元に届く頃は、リモートによる総会も終了しているはず。結果は来月号で報告致しますが、無事終了していることを祈るばかりです。

●東海支部三重県部会担当の全国俳句大会の投句締め切りも過ぎましたが、ご投句頂きましたでしょうか。来年の全国大会は北海道で開催の予定です。来年こそ皆様とお目にかかれますよう楽しみにしています。

●当協会の稲畑汀子会長が副会長を務め、俳句のユネスコ登録を目指す俳句ユネスコ無形文化遺産推進協議会の総会が七月九日、東京・江東区深川江戸

資料館にて開催されます。農学博士の小泉武夫先生の講演「俳句は力なり、発酵も力なり」も予定されています。故・有馬朗人氏の遺志を継ぎ、肅々と活動を続けています。

(須川)

花鳥諷詠七月号(通巻第四〇〇号)

定価二五〇円(但し、本代は年会費を含む)

年会費一〇、〇〇〇円

令和三年七月一日

発行人 稲畑汀子

発行所 公益社団法人

日本伝統俳句協会

〒151-0073 東京都渋谷区笹塚二丁目一八九

シャンブル笹塚二丁目B一〇一

電話 〇三三四五四五一九一

FAX 〇三三四五四五一九二

郵便振替 口座番号 〇〇一七二八六八二〇

印刷所 日本ハイコム(株)

〒112-0014 東京都文京区関口一丁目二二